




風の葬送

砂、というより灰、あるいは白い粉、といったほうが適切なようにも思える。

この土地の乾期は数ヶ月後に訪れるはずなのだが、すでに地表はひどく乾燥している。台地状の地形をしているその村には川がなく、村はずれにある沼から日常生活に使う水を運ばなければならぬ。飲み水には溜めておいた雨水を次の雨期まで少しづつ使うことになり、当然のことながら前年の雨期の降水量が生活や農作物の育生状態に大きく作用する。畑を見渡すと緑

落合 隆 ピンダー・ラタノー

(バンコック・ワットパクナム)



に覆われているようにも見えるのだが、大部分がイモ畑で他の作物を植えても育たないのだろう。砂地に根を付けたイモの葉が低いところで風にゆれている。

この東北地方の村からバンコックに来ている友人の僧侶に誘われて行ったのだが、正直なところ積極的に行きたくないような場所ではない。私は日本に生れ、あの緑豊かな湿润とした土地にいた。乾燥した冬があるといっても三月になれば青葉が芽吹く。その自然と同様に人間

関係も湿り気をおびている。時にはほど良く、時には過剰なほどに。

村へ行って三日目の夜。お経を上げに行くかと誘われ、少年僧もまじえた六、七人で一軒の家へ向った。どの家も板をまばらに打ち付けてあるだけで、寒期はかなり気温の下がるこの地方、朝方の寒さをどのようにして耐えているのか。私たちがその家の二階に上がると三〇人ほどの村人が集まっていた。

その日の朝、家の青年が他界した。



長い間病気で寝たきりだった青年の遺体は、テント状に張られた黒い布に

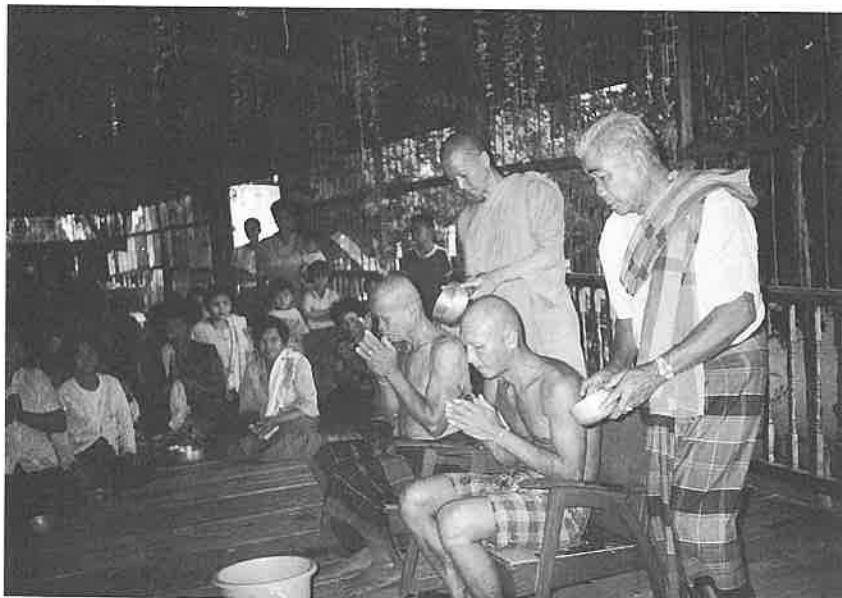
覆われ、脇には手製の粗末な柩が置かれている。人々は酒を酌み交し冗談を言っては大声で笑い合っていて、一見しただけでは何の集まりなのか見当がつかない。色着きの銀紙が貼られた柩は、別の世界から届けられた正体不明の物のように、部屋の中央で押し黙ったままだい。

翌日の午後はその家で沙弥の得度式が行なわれた。弟や甥が四人。村の住職に戒を授けてもらい三衣に着替える。ブワット・ナー・ソツブ（霊前得度）といわれるこの慣習はまだかなり残されていて、死者の係累の者が得度することによって得られるブン（徳）が、他界した者に送り届けられると考えられている。その四人の子供が先頭になり柩につながれた紐を持ち、百人あまりの村人たちが行列になって村を出て行く。私は、この村の寺には火葬の設備がないので隣の村まで行くのかと、同じように紐を持ちながら考えていたのだが、それが間違いである



霊前得度(ブワット・ナー・ソップ)4人の子どもがこの日1日だけの得度式

2人の農民が得度を行う。私は背中に聖水をかける



ことは間もなくわかった。雑木林、といっても半分死にかけたような木が、やっとの思いで立っているといった村はずれのその場所で行列は止った。

火葬はこの雑木林で行なわれるのだ。

丸太が組み上げてあり、すでに準備は整っている。泣いている者は一人もいない。照り付けて日射しの下の乾いた死。

数種類の読経の後、柩は数人の男たちによって持ち上げられ、丸太の上に置かれる。あお向けになっていた遺体を横向きに変えたのだが、何か意味があるのだろうか。長めの丸太が左右から柩を押さえ付けるように置かれると、村人たちは木の枝に葉を数枚くしぎしにしたものを下の方に一人一人置いてゆく。その葉に火が着けられると数秒のうちに丸太に火がうつり、さらに柩の板が燃え始める。それと同時に遺族が硬貨を空中にばらまく。村人たちは歓声をあげ

ながら先を争ってひろい集めている。

どの顔も笑っている。まちがいなく笑っている。

私は遺体が燃えつきるまで見ているつもりでいたのだが、全員で村へ帰らなければいけないと言われ、やむなく友人の僧と村へ向かう農道を並んで歩いた。

「これはとても失礼な質問かもしれないが、仮にあなたの父親が亡くなった時も、この雑木林でこの様にして火葬にするのですか。」

「そうです」と、淡々と答える。そして、「あの場所と道をはさんだ反対側にある場所で子供の遺体を火葬にします」と、彼が指さしたもう一つの雑木林はどこか全体に白っぽく、少しかすんでいるように私には見えた。

その翌日、私は一人で雑木林へ向った。その場所は禁域を示すために数本の切り取った立木

で矩形に囲ってあった。大腿部のあたりだろうが、まだ燃えきっていないようなところもある。いくら病気で長い間寝ていたといつても若い肉体、すぐに灰になろうとはしない。むしろ充分に生きえなかつただからこそ生への、肉体への渴望には強いものがあつたのだろう。

前日は私自身始めて体験することで周囲を見回す余裕がなかつたのだが、その林の中には火葬の跡がかなりある。まだ半年ぐらいかと思われ、ものも、ほとんどまわりの地面と区分けのつかなくなつてしまつたものもあり、よく数えれば十ヶ所以上になるだろうか。黒く変色した壺や皿、線香の燃え残りがあつてはじめてそれと知れる程度で、骨や灰は風に吹き飛ばされてしまつてゐる。

消滅。人が消滅してゆく過程が目の前に拡がっている。

村にもどつてから聞いてみたのだが、ある程

度の金持ちなら骨を集めて寺院の一角に安置することもあるが、ほとんどはそのまま林の中に捨て置かれるらしい。寺院に置かれる場合でも、使い古されたプラスチックのオイル缶に入れ、無造作に壁からぶら下げてあつたりする。村人たちの普段の生活の中での、かなり親密に見える大家族主義といつた湿り気と、死と死後のあつかいの乾いた様相。

この落差はどこから来ているのか。

東アジアの、あの地中の暗がりへ、あの意識の暗がりへ隠すようにして死を閉じ込める風習はこの土地にはない。

コラート高原からイサーン地方にかけての乾燥地帯は風の吹く日が多い。青年の死が白い粒子となつて空中を舞うようになるまで、さほどの時間はかからない。

仏歴二五三六年、西歴一九九三年、二月。